



# 令和5年度企画展「中世前期の領主居館」

上村俊洋

## はじめに

島津荘惣地頭職を得た島津氏は、その後、薩摩・大隅両国と日向国諸県郡に勢力を拡大し、他地域には稀な700年に渡る南九州の統治者として存続した。室町時代以降、他地域から南九州への領主勢力の流入・定着は見られなくなるが、古代末～南北朝期には多くの勢力が南九州に流入し、在来勢力と外来勢力の軋轢の中で、没落・分裂して他勢力に臣従する勢力もあり、南北朝時代の争乱を複雑化させた。

黎明館開館40周年記念企画特別展「南北朝の動乱と南九州の武士たち」(会期:令和5年9月29日(金)～11月5日(日)、於黎明館第2特別展示室、入場5,929人)に関連し、その背景となる古代末～中世前期の南九州の領主層の様子を、標記企画展(会期:令和5年9月5日(火)～11月26日(日)、於黎明館常設展示企画展示室、入場8,802人)で考古資料から紹介した。

令和5年度夏の高校野球大会応援風景は、コロナ禍(令和2～4年度)以前と異なっていたことが話題となった。高校生の部活動文化の継承にとって、コロナ禍3年間は、断絶・変質するに十分な時間である。

翻って、鎌倉幕府滅亡から足利義満による両朝合一までの約60年間は、人の一生に照らせば還暦相当の期間である。一世代30年間、また争乱期の当主討死による年少者の家督継承では一世代20年弱という場合も生じ、南北朝合一時点で、鎌倉時代の社会風土を知る世代は、2～3世代過去の人々となる。歴史学では、「南北朝以前は外国史の様だ」と評されたことがあり、南北朝期の前後で、人々の価値観・風習・文化が、断絶・変質するには十分すぎる時間である。優劣が生じながら中央勢力間の対立関係が長期化した背景に、これらを旗印として存在意義を保ちさせた、地方勢力間の対立状況があると考えられる。

表題企画展は、鎌倉幕府滅亡以前に生じた南九州の領主間対立の背景として、時代毎に異なる領主層の存立状況を紹介した。本稿は、その概要を述べる。

## 1 集落遺跡区画変遷と中世社会の変化

永吉天神段遺跡(曾於郡大崎町永吉)では、東九州自動車道(串良JCT-志布志IC間)建設に係る調査(持留川下流域右岸に臨む丘陵上の档ヶ山集落(漢和辞典類で「档」字の地名用例)を東西に横切る調査区)が行われた。丘陵東端の第1地点で古代集落、中央の第2地点で集落跡(古墳時代～近代)、西端の第3地点で中世地下式坑(北部九州・関東に類例。用途不明)等が検出された。第2地点の古代・中世遺構群は、主軸方向と遺物から3期に分かれる(次頁掲載調査区図、(公財)埋蔵文化財調査センター(以下「公財」)編2018第159図「中世の遺構の推定年代(平安末、鎌倉時代、室町時代以降)」,原図:1/1,700)。(平田1993,上村俊雄1994,北野2005・2006,高知県埋蔵文化財センター(以下、「埋蔵文化財センター」を「埋セ」と略)編2010,綿貫2010,阪本2011,松尾2012,公財編2015・2016・2018・2019,上村俊洋2017・2018,川口2018,守岡2022)

### (1) 第1地点の出土遺物と古代集落

#### ① 平安前期の集落

第1地点(掘立柱建物跡(SB)6棟と土坑(SK)7基など検出)は、役所的な要素は薄いものの、「交通の要衝地の一つとして、水滴・墨書土器や焼塩土器・鉄製品など特殊なものを持つ識字層が居住した」(公財編2016)と考えられる、9世紀(以下、世紀をcと表記)～10c前半頃の古代集落である。遺構や遺物から整理した南九州の古代集落分類(以下、川口分類)ではD:一般集落に相当する。

#### ② 志布志湾岸は日向国なのか?

古代以来大隅国に属する鹿屋市域と異なり、永吉天神段遺跡が所在する曾於郡大崎町は、建久8(1197)年「日向国凶田帳」記載の島津荘一円荘救仁郷に相当し、島津荘寄郡救仁院(志布志市域)とともに中世以降、日向国諸県郡に帰属したが、古代の日向・大隅国境は不明瞭である。志布志湾岸の大崎町から肝付町にかけて最南端の前方後円墳群が点在し、同地域は大和政権と関わる大隅直等の根拠地として、大隅建国以前の大隅地方の中心地域と思われる。日向国から贈啖(曾於)・大隅・始羅・肝属の4郡を割

いて建国された大隅国では、曾於郡以外の郡の位置や範囲は不明瞭である。

『大隅国風土記』逸文(他書に引用され部分的に伝来)には、海村的な大隅国必志里が記載され、志布志市境の大崎町菱田を比定候補地とすると、菱田川以南は大隅国域に相当する。全国の国郡郷名を記載する『倭名類聚抄』(承平5(935)年頃)で国郡郷名が一致した大隅郡・大隅郷は、その後、見えない。

11c初め、大宰大監平季基が都城盆地に島津荘を立荘した時期前後に、薩摩・大隅・日向国の郡・郷は荘園の拡大や、国衙と荘園の対立の状況に応じた郡郷制の改編が行われた。積出港を志布志湾に求めた島津荘が、郡郷改編どころか、帰属国まで変更させ、大隅国帰属でなくなった大隅郷の「クニ」郷改名に至ったとする説がある。

## (2) 第2地点第1期の区画軸と遺物

### ① 平安後期の屋敷墓と湖州六花鏡

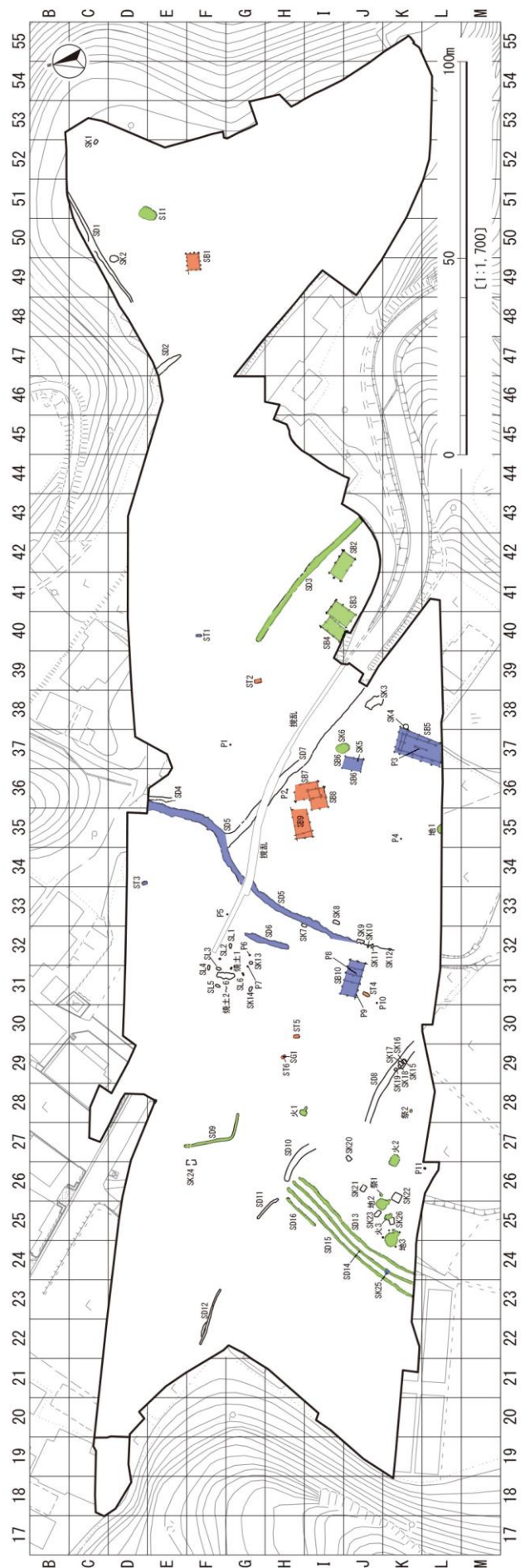
第2地点北東のSB1号、中央微高地の東側斜面のSB7~9号の4棟は、ほぼ南北方向の主軸を持ち、11c後半~12c中頃の遺物を伴う土坑墓(ST)4基(2・4~6号)と同時代の遺構と考えられる(右図中の赤色の遺構)。ST4~6号には11c後半~12c前半の篋切底の土師器が副葬され、ST2号は糸切底土師器ミニチュア羽釜と白磁の端反碗や湖州六花鏡が副葬される12c中頃の土坑墓である。区画溝は未検出だが、平安時代末の当遺跡の人々は、正方位に沿う建物を意識した。

### ② 湖州六花鏡と屋敷墓

宋代中国浙江省湖州地方で大量生産された輸入銅鏡湖州鏡が、神社奉納品や、経塚・ST出土品として見られる。鏡背に、陽鑄銘「湖州・」を持つ湖州鏡と、無銘の素文鏡の区別があり、平面的には円形・方形・花形(六花形、八花形)・猪目形・鐘形等があるが、時期・流入経路の違いで国内分布に地域差がある。九州の大半を占める六花鏡は東日本では見られない。鹿児島・宮崎両県では、湖州鏡の出土遺跡や奉納伝世された神社は、河川流域や周辺に水田をひかえた共通点があり、平安・鎌倉・室町時代にかけて、ある程度の政治・経済力をもつ勢力の存在が想定される。彼らは12cには末法思想を受容し、屋敷内・屋敷隣接地のSTに湖州鏡を副葬した。

### ③ 大隅半島中世領主の姻戚関係

中世大隅半島の有力者伴姓肝属氏は、平安後期に



島津荘を開発した平季基または子・兼輔の娘を娶った伴兼貞の子女が日向国南部から大隅半島各地の在地領主と姻戚関係を結ぶ系図を伝える。伴姓肝属氏や平姓救二院・安楽氏の系図と日向国櫛間院在地領主記録を照らすと、櫛間院在地領主は兼貞娘との姻戚関係に基づき、姻族の伴姓肝付氏族萩原氏への女系継承が窺える。平季基・兼輔との姻戚関係から伴氏の繁栄が始まるなど、中世前期の荘官系在地領主間での姻戚関係形成に基づく女系相続が見られる。

### (3) 第2地点第2期の区画軸と遺物

#### ① 鎌倉時代の交易

第2地点中央微高地東側斜面のSB5・6号、西側斜面のSB10号の3棟は、概ね北北東-南南西方向を主軸とし、溝状遺構(SD)5・6号の2条がSB10号に並行し、同時期のものと考えられる(調査区図中青色の遺構)。鎌倉時代の13c代(SB10号出土)、13c後半~15c(SD5号出土)、13c後半~14c前葉(ST1・3号副葬、糸切底)の土師器がみられる。同時期の特色ある遺物として、和歌山・徳島両県で主に出土し、高知県を出土西端と考えられていた紀伊産土師質甕(紀ノ川下流域の胎土を持つ地域性のある土器)が、南九州で初出土した。出土分布から、紀ノ川河口-四国南岸-九州東岸を結ぶ交流が窺われる。

第2地点の鎌倉期区画軸は、平安末の様相と異なる。太平洋岸航路によって搬入された可能性のある遺物の存在は、鎌倉時代の政治・経済の大きな変化が救仁郷に及んだことを窺わせる。

#### ② 鎌倉時代の太平洋航路

承久の変後、鎌倉御家人が西日本各地の権益を持つと、南九州に常滑焼等の東海産品が多数流入する。島津忠久が比企能員の変に連座後は、志布志津(志布志市)や柏原別府(東串良町)、種子島の港湾を押さえた北条氏(日向・大隅国守護職や島津荘日向・大隅方惣地頭職を持つ赤橋流や名越流)が活動する。

第2地点出土紀伊産土師質甕は、紀伊国(和歌山県)内や紀淡海峡を越えた阿波国(徳島県)での出土が知られていた。近年、土佐国(高知県)仁淀川下流域で川津機能を持つ上ノ村遺跡(土佐市)や、大崎町で出土したことから、北条氏が関与した太平洋沿岸航路の交流が想定される。紀伊国の海賊勢力熊野水軍の南北朝期の南九州来航は、この航路を傍証する。

### (4) 第2地点3期の区画軸と遺物

#### ① 南北朝期以降の変化

第2地点中央微高地東側斜面のSB3棟(SB2~4号)は北東-南西方向の軸を持ち、並行に走るSD3号と同時期と考えられ、遺跡周辺の現在の集落区画軸に近い(調査区図中緑色の遺構)。SD3号(東播系須恵器鉢や白磁碗、鎬蓮弁文青磁碗片が出土)は、遺跡所在地南麓の档ヶ山古石塔群へ通じ、中世に遡る道跡である。ほぼ同軸のSD4条(13~16号)中、SD15号検出炭化材は15c代(放射性炭素年代測定)のもので室町期以降の集落区画と考えられる。

#### ② 永吉天神段遺跡周辺の中世領主層

永吉天神段遺跡では、平安期、鎌倉期、室町期という、政治・社会体制の変化期に、集落区画が大きく変更される。区画軸変更には、領主勢力の交替など、何らかの契機を想起させる。

周辺の志布志湾岸では、次の展開が見られる。

- A 平安末期 荘官系領主間で姻戚関係を結ぶ平姓救仁院・安楽氏や伴姓肝属氏が活動。
- B 鎌倉期 救仁院・安楽氏が源平抗争期に没落。島津荘惣地頭職島津忠久が比企氏連座。北条氏(日向方赤橋流・大隅方名越流)が地頭定着。
- C 南北朝期 肝属氏・楡井氏(北条被官か)・千種忠顕(建武政権系)雑掌・奥州島津家(大隅国守護)等が抗争。
- D 室町期 奥州島津家の勢力圏拡大。以後、南九州外から転入定着する勢力はない。

当遺跡第2地点では、第1期≒A、第2期≒B、第3期≒Dに相当する。第3期区画軸は現集落区画軸に概ね継承された後、区画軸変化が見られない。D期以降の外來領主層参加がないことに相応する。

## 2 古代・中世の開発領主居館

永吉天神段遺跡第1地点で古代集落が形成された平安時代前期には、京都系官人出身者が、国府から離れた開発後進地域の水陸交通の要所に構えた居宅を開発拠点とし、富豪化した。ともに国史跡に指定された、出羽国古志田東遺跡(米沢市)・日向国大島畠田遺跡(都城市)等の居宅では遣水状遺構が検出され、京都文化に因む庭園を設けた可能性がある。

永吉天神段遺跡第2地点第1期の南北方向の主軸が重視された平安時代末期以降、大隅正八幡宮領や島津荘の荘官は、郡郷院司として在地領主化した。平安末に中央政権と対立した阿多忠景等の薩摩平氏一族や、南北朝期に島津氏と争う加治木氏一族等の居館跡では、貴重な貿易陶磁器を使用していた。(鹿

児島市教育委員会(以下、「教育委員会」を「教委」,「委員会」を「委」と略)編1992・2016,川内市編1974・1976,川内市歴史資料館編1985,金峰町編1987,笠沙町編1991,米沢市教委編2000,蒲生町教委編2001,鹿児島県立埋セ編2002,輝北町教委編2005,宮崎県立埋セ編2008,都城市教委編2013・2018,始良市教委編2013,始良市誌編纂委編2022,鹿児島市ふるさと考古歴史館2022,永山2002・2022,柴畑2017,下鶴2022,下向井2022)

## (1) 平安前期の富裕層居宅

### ① 水陸交通の要所をおさえる経営拠点

#### ア 日向国諸県郡 i 大島島田遺跡

大淀川・支流庄内川の合流点で比高差1.5mの沖積地の国史跡大島島田遺跡に平安前期9～10cの屋敷跡があった。対岸の霧島連山を遠望する立地に、大型掘立柱建物跡(孫庇付総柱,290㎡),門,池状遺構,柵列等の遺構が検出され,官衙的遺物(「泉」「春」「井」等の墨書土器や,緑釉陶器・灰釉陶器・青磁・白磁・石製銚帯具等)を伴う。都城盆地は,駅路(西海道東路)水俣駅・嶋津駅が盆地内を南北に走り,大淀川水系を押さえる水陸交通の要所である。集落遺跡増加期で,遺跡は4期に分かれる。第Ⅰ期(9c中頃～後半)は小規模建物と倉庫様建物で構成され,第Ⅱ期(9c後半～末)は北側にコの字状に建物群が配置され,公的施設(日向国諸県郡の郡家から離れた都城盆地における郡家別院等)の可能性もある。第Ⅲ期(9c末～10c初頭)には,孫庇付大型建物や池,門,区画溝等が構築され,第Ⅳ期も同施設に遣水状遺構や区画柵が構成される等,Ⅲ期同様の性格が考えられる。

平安貴族の寝殿造に類似する屋敷と出土遺物は,「前司浪人」(国司任期終了後も現地に留まり,国府から離れた地で土地開発を行う有力者)の経営拠点の可能性を示す。類例に古志田東遺跡(水陸交通の要所に船着場を備えた三面庇付大型掘立柱建物(10×3間)を築く)がある。

#### イ 大隅国桑原郡 ii 高井田遺跡

高井田遺跡(始良市,国道10号加治木バイパス建設に伴い調査)は,網掛川と支流宇曾ノ木川に挟まれた小台地上に所在し,西海道西路(薩摩国府(薩摩川内市)―大隅国府(霧島市)間)が通じる水陸交通の便を有し,春日神社(藤原氏の荘園経営に所縁)が隣接する。

古代SB5棟が検出された。主軸方向が一致するSB1・2号,SB3・4号が近接し,時期差がありうる。主軸方向が異なるSB6号は,中～近世礫集中遺構1の下から出土し,SB1～4号よりも新し

い可能性がある。礫集中遺構1下層で古代礫敷溝状遺構(9c代の須恵器を伴う)が検出された。台地中央から流下する溝状遺構(全長約24.5m×幅1～2m)で,周囲より大きな人頭大の礫を数個組み合わせて仕上げた段差部分や,溜枳的側面(2箇所幅が変化)もみられ,遣水の機能を持つ可能性がある溝である。

当遺跡の主は,遣水状遺構を伴う庭園を好み,春日神社ゆかりの土地経営に携わる,京都系官人出身の富豪層の可能性もある。川口分類B2:地方有力者居宅に相当する。

#### ウ 薩摩国谿山郡 i 不動寺遺跡

鹿児島市谷山は,古代薩摩国谿山郡,中世島津荘寄郡谷山郡,近世谷山郷,谷山市を経た。

不動寺遺跡(谷山城跡東麓)では,官衙的遺物(平安時代の緑釉陶器,越州窯系青磁等の初期貿易陶磁,風字硯・転用硯等)が出土し,池状遺構・火葬墓・円形周溝墓・土師甕埋納遺構のほか,館跡(桜島を遠望する立地,遣水状遺構を伴う)が検出された。谷山郡家が置かれた可能性が高く,後,有力者居館化(園池を伴う)した。南南西約500mの谷山弓場城跡では不動寺遺跡関係者を埋葬した可能性を持つ10c後半の蔵骨器を伴う火葬墓が検出された。不動寺遺跡の円形周溝墓は肥前・筑後国府周辺等と関連が深い10c後半～11c前半の被葬者が葬られたようである。

川口分類B1:郡衙・駅家相当の不動寺遺跡は,当初公的施設としての性格を持ったが,都の情報を得ることの出来る有力者の居館的性格に変化した。12c代の不動寺遺跡の遺構は不明だが,12c半ば頃までは貿易陶磁器(大宰府分類白磁碗Ⅳ・Ⅴ類)が出土し,周辺に何らかの公的機能が残ったと考えられる。薩摩平氏(阿多忠景等)の谷山郡進出期にあたる12c半ば以降,郡の中心は北麓遺跡(鹿児島市谷山中央,不動寺遺跡東方約1km,谷山小学校西側周辺)に移る。

## (2) 中世郡郷院司の経営拠点

### ① 大隅国正八幡宮領

#### ア 大隅国桑原郡

##### ア) 桑原郡 ii 市頭遺跡(加治木郷木田氏館跡)

始良市加治木町木田の中世木田城山麓東側に市頭A,南東麓に市頭B,九州自動車道を挟む南側に市頭C遺跡がある。B・C遺跡では,中世の堀・ST・SB・火葬遺構・井戸跡・炉跡が検出され,黒色土器・緑釉陶器・越州窯系青磁・滑石製品・白磁等が出土した。建物跡は木田氏(加治木氏8代親平の子信経系統)館跡と推測され,自然河川・地形を利用した

堀を廻らす人工的防衛施設と考えられるが、延文元(1356)年岩屋城の戦いで焼失した。

A遺跡では8cに遡る埋葬痕跡がある。B遺跡内の堀の外には多数のSK(ST状13基、火葬墓の可能性のある1基等)が、直線状に配置された墓域を形成する。C遺跡は12~15c頃を主体とし、低位部で河川に接した時期の護岸施工痕跡が確認された。新安船(1323年中国寧波発、博多行航路上で沈没し、朝鮮半島西南沖で発見)引揚積荷に類似する希少な鉄釉梅瓶片14点が、ST3他から出土し、館焼失以前の搬入品と考えられる。梅瓶は領主館等で出土する。

「大隅国図田帳」(建久8(1197)年作成)では大隅正八幡宮(現:鹿兒島神宮)領加治木郷121町7段半のうち、郷内最大の公田永用名は加治木郡司大蔵氏領有で、郷内各地に一族を配置し加治木氏に成長する。

#### 4) 桑原郡iii 三池原遺跡蒲生院蒲生どん屋敷

蒲生氏初代舜清の最初の屋敷跡と伝わる三池原遺跡(旧蒲生町教委が、旧蒲生町道下久徳一川東線整備工事に伴い発掘)では、調査区内の南北に通る道路の北側SD(南北約40m×上部幅1.2~1.5m、底部幅0.5~0.7m×深約0.8~1.0m)、南端側溝(東西約5m×上部幅0.6m、底部幅0.4m×深0.3m)の2条の中世SDを検出した。遺構内から、鎌倉時代前後の土師器片・青磁器片が出土した。伝「蒲生どん屋敷」区域は、東西200m×南北250mの範囲内と推定される。

後、蒲生氏は西方の山城・蒲生城を拠点化した。

#### ② 島津荘大隅方小川院内百疋村 新田遺跡

新田遺跡(鹿屋市輝北町下百引)は街道の要衝(牧之原・鹿屋・大崎の分岐点)で、周辺に百引本城跡等の中近世史跡がある。百引地名は、安元2(1176)年に島津荘官藤原姓富山勾当安兼の島津荘小川院内百疋村弁済使任命史料(宮崎県総合博物館蔵『富山家文書』、黎明館常設展示に複製展示)に現れ、後(養和元(1181)年~文禄年間)藤原姓図師氏が知行した。弁済使職、図師職は、荘官職である。

古代には、南北を主軸とするSB5棟が、平坦地の東西方向に配置され、SB2柱穴1基から祭祀行為に伴う可能性がある供膳具(土師器・黒色土器の坏・椀等)が一括出土した。墨書土器、土師甕、須恵壺、玉縁口縁白磁、瀬戸窯系陶器や緑釉陶器等も見られ、川口分類B2:地方有力者居宅に相当する。

中世には周辺傾斜地も利用し、遺構は1期(11c半ば~12c初め)、2期(12c半ば~13c半ば)、3期(13c末~14c末)にわたる。1期は、古代期同様の遺構分布

域にSDとSB、黒色土器等が検出された。2期は、平坦部を最大限に利用し、青磁・白磁・土師皿等が出土した。3期は、南側傾斜地まで広げた全域で、SB、竪穴建物跡、道跡、SD、土坑等が検出された。2・3期を通じて、大小2基組み合わせの竪穴建物跡が検出され、鎌倉期に特徴的な、東播系須恵器や常滑焼・山茶碗等東海産陶器が大量出土した。

#### ③ 薩摩平氏の郡司居館

##### ア 薩摩国薩摩郡 西ノ平遺跡

薩摩国北部は、川内川以北に出水郡(出水・阿久根市)と高城郡(国府所在、川内川右岸の薩摩川内市)、川内川以南に薩摩郡が置かれた。薩摩郡域の上ノ原遺跡・成岡遺跡・西ノ平遺跡(薩摩川内市中福良)が発掘(国道3号隈之城バイパス建設に伴う)された。西ノ平遺跡は、背後の高江山地から木場谷川(川内川水系隈之城川支流、東西に流下)流域平野部に向け下降する段丘末端の平坦部3段に平安以降の集落が形成され、上中2段(平安期)、下段(鎌倉期)に遺構が集中する。

平安期SB跡は2期に分かれ、前期5棟は中段に集中し、後期4棟は上中段境の段差を軸に両段に配置された。大宰府経由の流入と想定される遺物(越州窯系青磁・荊州窯系白磁・緑釉陶器)や、官衙的遺物(須恵質円面硯・転用硯や銅製帯金具(巡方)等)が見られ、川口分類B1:郡衙・駅家の薩摩郡衙に比定される。

鎌倉期のSB4棟(主軸が共通)は、重複関係から2期に分かれる。SB1(柱間隔2m、南北3間×東西5間)の円形柱穴(直径0.8~0.9m)は地固めを数層施し、礫板状石の上に柱を据え、石表面に太い柱痕跡(直径0.2~0.3m)が残る。より古いSB3は総柱建物(南北3間×東西2間、礫板石を持たず柱痕跡の残る)である。溝1(台地の等高線に直交し南北方向)は断面逆台形(幅約1.8m×深さ0.8~1.0m)で、陸橋部分(大雨時に雨水が一気に流下しないよう溝を塞ぐ)を持つ。溝2(陸橋部上方から東へ直交)は、先のSB群領域南側の区画溝である。屋根付の方形土坑(周囲を2間四方の掘立柱建物が覆う)の他、多数の土坑(平面系が円形・楕円形・方形等)あり、土坑F(土器等を伴う)は、竪穴建物跡等の貯蔵施設と想定する。

『倭名類聚抄』薩摩郡に比定地不明の3郷(避石・幡利・日置)が記される。「薩摩郡司平忠直讓状」(建仁3(1203)年、『薩藩旧記雑録 前編』所収「山内文書」)に平礼石寺寺領が記され、「忠兼申状」(嘉禎4(1238)年、同「山内文書」)には、「さつまこほり郷ひられいし」とあることから、平安期の避石郷は鎌倉期に平礼石郷と表記され、薩摩郡衙所在郷と考えられる。平安末、

薩摩平氏阿多忠景の弟忠永の薩摩郡司就任時に平礼石寺は古寺として存在し、寺修造に郡司が関与した。郡司・郡衙と結びつく郡寺と想定される。

### イ 薩摩国河辺郡 i 河辺氏居館跡

県史跡清水磨崖仏(南九州市川辺町清水)と関連史跡の河辺氏居館跡東側「字南屋敷」(清水磨崖仏南方約300mの埋蔵文化財包蔵地、いずれも南九州市教委が調査)は、河口部に中世交易拠点(持躰松・渡畑・芝原遺跡(南さつま市))がある万之瀬川上流域である。直径40cm程の柱穴群(桁行柱間1.5m×東西方向3間以上、梁行柱間1.7m×南北方向2間以上の間隔)は、北側庇を備えた総柱建物跡の北東角部分相当で、柱穴内に14c後半～15c前半の篋描蓮弁文龍泉窯系青磁碗片、包含層に古代・中世遺物が出土した。

指宿氏系図等で知られる伊作良道(薩摩平氏祖)の子河辺平太道房(河辺郡司祖)は、薩摩一國惣領と呼ばれた弟阿多平四郎忠景に討ち取られた。平次郎道平(道房の子、当時3歳)は母方の縁で豊後国に逃れ、25歳で河辺に帰還した。三代平太道綱は、源頼朝期の文治2(1186)年に貴海島(『吾妻鏡』表記、「指宿氏系図」では「貴賀島」表記)追討に参加した。薩摩平氏一族は万之瀬川を押さえ、希少交易品や海外文化を入手出来た。北条・鮫島・二階堂氏等が万之瀬川流域の地頭職を得た鎌倉期に河辺氏は弱体化する。

### ウ 薩摩国谷山郡 ii 北麓遺跡

薩摩国内での島津荘拡大に対抗する阿多忠景は、保延年間(1135-41)以降、本領の阿多郡(南さつま市)を大宰府領化、島津荘寄郡化する谷山郡の伊佐知佐社(現・伊佐知佐神社、鹿児島市)を大宰府領社化した。別府五郎忠明(忠景弟)は、忠景代に加世田別府(南さつま市)と谷山郡の領知権を得るが、忠真(忠明子)は、忠綱(忠真弟)に討ち取られる。その後、宗阿弥陀仏(忠景娘)婿・阿多宣澄(信澄、重澄、重純。肥前国の彼杵三郎久純と伊作良道三女の子)が忠綱を討ち忠明以来の領知権を継承した。「平家謀反之時、張本其一也」とされた宣澄が郡郷下司職(大宰府領阿多郡、島津荘日置南北郷・伊作庄・谷山郡)を失い(建久3(1192)年関東御教書)、信忠(忠真・忠綱弟、宗阿弥陀仏養子)が谷山郡を領知、子孫が谷山郡司職を継承した。

谷山郡の中心は、平安期の不動寺遺跡から、中世前期(平安末～鎌倉期)には、約1km東方の北麓遺跡に移る。弥生時代の環濠集落が検出され、近世谷山郷地頭仮屋周辺に郷土が集住した麓集落で、一帯は近現代谷山町・谷山市の中心地であり、現在も鹿児

島市役所谷山支所が置かれる。

鹿児島市教委による北麓遺跡の発掘調査は約20回に及び、個々の断片的な調査成果を総合すると、堀(薬研堀・箱堀)に囲まれた方形平地居館区画(約160m四方)が想定される。谷山支所前通線改修前の現道に東西に並行したSD3(検出面上端幅約3.6m×深さ0.4～1.4m)は排水機能向きではない(底面高海拔約4.3mで安定)。区画内では、堀跡の軸方向と概ね一致して根石を伴う中世総柱建物跡(4×4間)が検出され、複数の遺構内から12c中葉～14c代の青磁碗・土師器等が出土し、平姓谷山郡司一族の活動期に合う。方形平地居館想定区域外北側の土師器集積遺構SS3では、土師器完形品100点以上(13c後半～14c初頭を主体)が出土し、饗宴に用いたとすると、居館は移動・拡大した時期がありうる。

### (3) 長者伝説 薩摩国概要

県内では、A志長長者(薩摩川内市久見崎倉浦)、B日暮長者(薩摩川内市向田町)、C小牧長者(薩摩川内市祁答院町小牧)、D高橋長者(南さつま市加世田高橋・金峰町高橋)の長者伝説が知られる。

A志長長者伝説は相良氏(鎌倉時代初期に薩摩川内地方との関わりが生じる)、B日暮長者伝説は若松忠兼(12c後半に薩摩郡司となった薩摩忠友の五代目、鎌倉後期)、C小牧長者伝説は大前氏(11c末には祁答院地方に土着し、12c後半の道助の頃に薩摩在国司・祁答院郡司)または大村氏(建久元(1190)年頃に大村城に拠って大村地方を支配したとされる大前道房の子孫)、D高橋長者伝説は阿多忠景との関係が指摘される。

A相良氏は一族内の内訌が続く15c末以降に川薩の地に影響を与えることは少ないといわれ、B若松氏は室町時代の史料に姿を現すことがなく、C大前氏は室町時代に入ると将軍に所領を没収され没落し、D阿多忠景は12c後半に追討されて没落した。4つの長者伝説とも、長者のモデルと考えられているのは平安時代末期もしくは鎌倉時代の在地領主で、いずれも平安時代末期～室町時代には没落していることがわかる。(黎明館資料調査編集員竹森友子が本節の検討・展示を担当した。)

### 3 東国勢力の経営拠点

永吉天神段遺跡第2地点第2期の区画軸が形成されていた鎌倉時代には、関東御家人やその被官が南九州に流入し、鎌倉周辺等で見られる竪穴建物を、南九州の交通拠点周辺に構築し、鎌倉―京都―南九

州の所領を結ぶ物流に関与した。貿易陶磁器だけでなく、東海産陶器等も南九州に流入する。鎌倉時代後半には、荘官系在地領主側と地頭側との土地を廻る対立は深刻化し、荘園内を荘園領家政所側と地頭所側で二分する下地中分の取り決めが行われるなど、平安末以来の在来勢力と東国勢力との軋轢が高まった。在来勢力内部も同族間で権益を争い、東国勢力に従属する分流が出る場合もあった。(三木1971・1981・2006, 高島1978・1993・1996, 日吉町編1992, 堂込1999, 井原2003, 日吉町教委編2003, 日置市教委編2007, 南九州市教委編2009, 大分県埋セ編2010, 安藤2013, 公財編2014, 上村俊洋2020・2023, 下鶴2021, ミュージアム知覧2022)

### (1) 東国勢力の竪穴建物導入

新平田遺跡(伊佐市大口, 伊佐盆地北西部, 川内川支流平出水川右岸, 標高208m, 中世遺跡分布域) 1帯は川内川水系の支流に沿って出水・水俣・球磨・都城盆地に通じる交通の要所で、南北朝期以後平泉城が機能した。S B 32棟, 方形竪穴建物7軒が検出された新平田遺跡第1地点は、12c後半~13c代を通して継続的に営まれ、3期に分かれる遺跡継続期間中、2期の13c前半代に建物数が最多になる。

竪穴建物は、鎌倉の都市域周縁で検出・注目され、陸奥国南部では内陸部の河川・街道沿線の宿・市・津的な例が指摘される。日向国諸県郡でも、官道等古代道路跡近接の法光寺遺跡(えびの市)や並木添遺跡(都城市)で検出された。鎌倉時代に東国御家人が全国各地に所領を得ると、海運・内陸水運網の結合と陸運の整備が進み、鎌倉・京都への求心的な全国流通網が構築され、貨幣経済が広まる。交通・流通網を掌握した東国御家人等が持ち込んだ竪穴建物は、焼土を伴うものもあり、交通の要所での工房や貯蔵施設等の性格が想定される。守護職や島津荘惣地頭職を北条氏が掌握した日向・大隅国で竪穴建物跡検出遺跡が多く見られる。鎌倉幕府滅亡後の南九州では、在地領主主体の地方経済が進展したことを反映し、南北朝期以降の領主拠点となる山城等で竪穴建物跡が検出されるようになる。

### (2) 薩摩国出水郡 薩摩守護職島津氏の拠点

古代薩摩国出水郡域の中郡遺跡群(出水市野田, 南九州自動車道西回り道建設に伴い発掘)は、遺跡南方には西海道西路(大宰府-筑後国-肥後国-薩摩国の各国府を結ぶ)が東西に走り、肥後国水俣駅(水俣市)-薩摩国市来駅(出水市)-薩摩国英祢駅(阿久根市)

-薩摩国網津駅(薩摩川内市網津)-薩摩国府(薩摩川内市)の市来-英祢駅間の北側に当たる。古代末の島津荘貢納物は、都城盆地北西から西海道肥後・日向連絡路に沿って加久藤盆地・伊佐盆地を経た後、駅路から離れて出水平野に下り船積みした。南北東方向の結節点となる出水郡の同遺跡は、古代以来、中央勢力が進出したと考えられ、撰閣家の経営拠点に特徴的な楠葉型瓦器や、威信財的な価値を持つ鎌倉時代の交易品(景德鎮産青白磁龍首水注)が出土した。

中郡遺跡群は島津氏初期五代に所縁を持つ史跡もあり、北側の木牟礼城跡は島津氏の薩摩国における最初の守護所の伝承もある。島津氏初期に当地で活動した明白な史料・遺物はないが、出土遺物(上記の他、肥前国彼杵地方産滑石製石鍋片, 12c後半-13c前半龍泉窯系青磁碗Ⅰ類, 13c前半龍泉窯系青磁碗Ⅱ類, 上記龍首水注等)は、京都や鎌倉を背景に持つ勢力が所在した可能性を示唆する。平野部の中郡遺跡群を経営拠点に、南北朝の争乱期に近隣丘陵を城塞化する必要から木牟礼城を構築したと思われる。

### (3) 薩摩国河辺郡 ii 北条得宗被官千竈氏館か

持鉢松・芝原・渡畑遺跡の万之瀬川上流で、支流野崎川分岐東方、北の野崎川と南の谷山街道・国道225号が挟む水陸交通の要地に馬場田遺跡がある。

大溝(幅4m強, 一辺40m以上)で方形に区画された平地居館が営まれ、鎌倉時代を中心とした貿易・交易品(東海産陶器や徳之島産カムイヤキ)が多数出土した。尾張国(愛知県西部)出身・鎌倉幕府北条得宗家被官で、南西諸島権益を譲渡する千竈時家譲状(千竈文書, 個人蔵, 長島町歴史民俗資料館保管)を持つ千竈氏の関与が想定される。万之瀬川河口を抑えた交易権益は、北の清水に居館跡を残す平安末以来の河辺氏等の薩摩平氏から、鎌倉時代の活動がうかがえる馬場田遺跡の主や流域に地頭職を得た北条氏・鮫島氏・二階堂氏等に移ったことが考えられる。

### (4) 薩摩国日置郡 領家政所と地頭所の軋轢

肥前平氏系伊作良道の伊作本主権益は、良道孫・宣澄(良道三女と彼杵三郎久純の子)が、宗阿弥陀仏(阿多忠景嫡女)婿となり、郡郷下司職(大宰府領阿多郡, 島津荘日置南北郷・伊作庄・谷山郡)として継承したが、「平家謀反之時、張本其一也」として、鎌倉幕府はその権益を否定(建久3(1192)年関東御教書)した。伊作本主は、良道嫡女から宣澄兄弟親純に譲られ、親純-則純-實純-有純-忠純の系譜が継承した(「薩摩伊作荘并日置郷下司系図」)。元享4(1324)年

以前の伊作荘・日置北郷(日置市日吉町吉利一帯)領家雑掌相伝文書には伊作下司有純と日置下司弘純(宣澄曾孫, 日置郷權益継承を主張)がみえる。日置荘は, 郡司系阿多忠景の權益拡大に対抗し, 弥勒寺(宇佐八幡宮系)に寄進され, 1185年以降, 小野太郎家綱(近江源氏佐々木氏系)と子孫が下司職を継承した。

一方, 「薩摩国凶田帳」には, 伊作郡・日置北郷・日置南郷51町のうち島津寄郡36町は万揚房(紀姓伊集院氏桑波田万揚房覚弁)領知と記された。また, 伊作郡本主伊作平四郎, 日置北郷70町本郡司小藤太貞澄(平重純の子), 日置北郷内弥勒寺領日置荘30町下司小野太郎家綱, 谷山郡182町に益山太郎が記され, 薩摩平氏の權益は, 東国勢力に侵食されている。

「日置北郷下地中分絵図」(東京大学史料編纂所蔵)には, 「領家政所」と注され, 北東近隣には過去の領主と思われる「吉利大夫入道址」(出水島津家国久三男・吉利島津家初代秀久の16世紀の居城「吉利古城」として日置市教育委員会が発掘調査)の区画も示される。領家政所西に隣接して「地頭所」が記され, 地頭島津(伊作)宗久の代官が活動した。これら3箇所は絵図に方形区画で描かれる。領家政所跡は、『三国名勝図会』(江戸時代後期編纂)に「領家宅地」図が掲載され, 当時の地名を道上(みちのうえ)と呼んでいる。日置北郷下地中分は, 地頭代道慶と領家一乗院雑掌掌信との間で取り決められ, 元享4(1324)年に絵図が作成された。中分後に地頭方となる領家政所は, 領家方となる中分線以北へ移転したと考えられる。

吉利古城跡の発掘調査では, 建物跡が想定できる柱穴6基が検出され, 柱穴内から古代と思われる土師器片・須恵器片が出土した。

上記絵図の中分線上にあつて, 地頭所・領家政所等が集中するエリアから北方の山林地域の境界付近と考えられる原口遺跡では, 糸切底土師皿と内黒土師碗の組み合わせが出土してSTと考えられるSK2基の他, 13~14代の貿易陶磁器や, 肥前国産交易品である滑石製石鍋の再加工品が出土した。

#### 4 居館の城塞化

荘園経営拠点や領主居館では, 大溝で区画された例(既出の三池原遺跡, 北麓遺跡, 馬場田遺跡)が見られる。南北朝期に武力抗争が顕在化すると荘園経営に関わる拠点を城塞化する他, 抗争が継続すると周辺の丘陵や山岳寺院を城郭化(豊後国大友氏の高崎山城, 筑前国少貳氏の有智山城等)した山城を利用する

ようになる。荘園経営拠点は, 穀倉地や水陸交通の要所を押さえており, こうした立地に構築された中世城郭は, 南北朝期の争奪対象になった。(隼人町教委編2001・2003・2005, 霧島市教委編2006・2008・2017, 国立歴史民俗博物館編2010・2022, 霧島市立隼人歴史民俗資料館・黎明館編2013, 鹿児島市教委編2015・2016, 上村俊洋2020・2023, 三木2020, 都城市教委編2022, 鹿児島市ふるさと考古歴史館2022)

#### (1) 日向国諸県郡 ii 島津荘経営拠点の大溝

郡元西原遺跡(都城市)では, 断面逆台形(検出面で幅3.3~4.4m, 深さ1.5m前後, 底面幅約1.5~2m)の区画溝状の大溝が検出された。関連調査と総合して, 方形空間(約30×50m)を区画する南西隅角相当の大溝は, 出土遺物や埋土中の火山灰層から, 11c後半~12cに機能して13cには埋没した。万寿年間(1024~28)に平季基が立荘した島津荘の拡大期に構築された荘園経営拠点の一部の可能性がある。鎌倉幕府勢力が介入する13c代には機能しなくなる。

中世南九州の文献史料上で「城」の初見は, 穆佐院政所(穆佐城同一地域か。城郭化した伊東祐広を, 1335年12月に足利尊氏が土持宣栄に討ち取らせる)や, 跡江方政所(祐広方肝属兼重が城郭化し, 1336年1月に尊氏方宣栄が追い落とし焼き払った)の一連の記事で, 以後, 兼重の穆佐城・高浮田城・池内城襲撃, 1月末祐広の猪野見城入城と頻出する(1336年2月7日「土持宣栄軍忠状」(『旧記雑録 前編1』1776))。

穆佐院・跡江方の政所という荘園経営拠点施設(大溝で区画されたか)は, 南北朝期の争乱時に防御施設化し, 最初期の城郭として利用された。荘園経営拠点は, 平地の水陸交通拠点に構えられ, 郡元西原遺跡では方形区画で構築された。荘園経営に便利な平地居館の城塞化は石見国益田荘領主益田氏の居館三宅御土居跡(島根県益田市), さらに山城等への居館の移動は, 益田氏の七尾城跡や三浦和田一族の越後国奥山荘城館遺跡群(新潟県胎内市)で見られる。

#### (2) 大隅国桑原郡iv 堀と土塁が囲む館

国史跡鹿児島神宮は, 式内社(927年編纂『延喜式』記載の神社, 「大隅国五座 大一座 小四座 桑原郡一座 大 鹿児島神社」と表記)で, 薩摩・大隅・日向三国唯一の大社。1087年には八幡神を取り入れ八幡正宮, 中世には大隅国一宮大隅正八幡宮と呼ばれた。神宮を支えた世襲社家のうち, 桑幡・留守・沢・最勝寺の四社家館跡は, 堀・土塁に囲まれた1町四方の規模で, 貿易陶磁器が多数出土し, 繁栄ぶりを伝える。



息長姓桑幡氏は、息長清道(12c後半の53代)が平清盛と親交があり(『長門本平家物語』)中世社家筆頭として栄えた。堀(薬研堀、幅約4m×深さ3m)と土塁が囲む区画(南北90m×東西100m)内の館(庇付礎石建物や池状遺構を伴う)に11c後半頃から居住した。

1363年に初代が石清水善法寺から下向した紀姓留守氏の館は、堀(幅4～7m×深さ3～4m)と土塁(版築工法、現存高約3m×幅約11m×長さ40m)が囲み、北西が屈曲する約1町歩の区画(東西約70m×南北100m超)に、室町儀礼的な礼門・脇門を備えた。

842年下向後、田所検校職に就いた嵯峨源姓沢氏館は、堀(幅4～5m×深さ2.0～3.5m、一部薬研堀)で囲まれた区画(80m四方)で、出土資料から11c後半頃以降、居住したことが分かる。

11c末下向、別当職を務めた藤原姓最勝寺氏の館は、堀(幅約5m×深さ約4m、傾斜角約85度)が囲む平面台形状の区画(長辺85m×短辺60m)内から11c後半以降の遺物が出土した。堀外に中世前期の遺構が広がり、時代により規模が異なる可能性もある。

中世領主の館規模は、複数国統治の大名級(甲斐武田・周防大内・豊後大友氏等)守護館で200m前後四方、数郡から一国統治の大名級(越前朝倉氏等)が100m前後四方、村落領主級が50m前後四方の傾向にある。単なる区画溝と思えない幅と深さを持つ防御的な堀に囲まれ、貴重な貿易陶磁器を多量に保有する大規模区画に館を構える四社家の富裕ぶりがうかがえる。

### (3) 薩摩国谷山郡iii 平地居館と中世山城

中世前期には、谷山郡の中心は不動寺遺跡から北麓遺跡に移った。平安末以降、北麓遺跡で遺構・遺物が豊富に見られ、130m四方以上の方形区画があり、平姓谷山郡司家の拠点が置かれた可能性がある。

一方、地頭島津氏庶流山田家が谷山郡地頭として鎌倉期に活動するが、一族で山田・宇宿等を名乗り、谷山郡北部山田付近を拠点にした。山田は、島津氏が鎌倉期に拠点を築きつつあった日置郡・伊作郡と街道が通じ、鹿児島郡にも隣接し、薩摩半島西岸から鹿児島湾岸へ進出する橋頭堡の地にある。

山田家は、谷山郡司家との姻戚関係を基に谷山郡内の権益継承を主張して、鎌倉期に両家で訴訟を繰り返しており、南北朝期の島津氏と薩摩平氏の対立の端緒がうかがわれる。訴訟資料では、谷山郡司側の拠点施設に関連すると思われる堀之内地名等が見えるが、比定地不明。両家の争論は、建治2(1276)年に父山田忠真から地頭職を譲られた三代宗久(道慶)期の弘安年間(1278-1287)～正中2(1325)年に争

われた。1324年成立の日置北郷下地中分絵図に記名した日置北郷地頭(伊作島津宗久)代道慶との関係は不明。山田家の活動拠点の立地を前述の様に考えると、日置・伊作・谷山郡を地頭島津勢力が一体的に捉えて、谷山郡地頭が日置北郷経営に関与したか。

南北朝期には、不動寺遺跡西側の谷山城跡に遺構や遺物が見られる。麓の不動寺遺跡では、薬研堀の大溝3条が並行して検出され、遺構内から中世前期に遡る貿易陶磁器が出土した。北側に永田川が流下する北麓遺跡周辺は、前近代には東側を海に面し、地方統治・物流掌握の拠点に適地で、近世谷山郷の地頭仮屋と行政単位の麓が置かれた。一方、地頭側との対立が武力抗争に繋がる場合、1km西方の、背後に谷山城を控えた不動寺遺跡前面の大溝が防御機能を高めたのではないだろうか。

南北朝期に登場する「城」は、全国的にも、平野部の荘園経営施設や、山上の宗教施設を城塞化することで誕生した。不動寺遺跡背後の谷山城が、谷山地域の拠点として登場し、南北朝時代の南九州の争乱の舞台となっていく。

## 終章

### (1) 荘官系領主の没落後

南北朝期南九州の領主層の対立について、それぞれの存立基盤を背景と捉えた。平安末以来の荘官系領主層は、中央勢力(平家政権・鎌倉幕府)の介入後も、存続を果たした家、荘官権益を否定されて没落した家があるが、没落後も姿を変えて存続を図ったらしい家も窺われる。荘官系領主として存続し得た領主層でも、鎌倉期を通じて地頭勢力との軋轢や分割相続による領地経営の困難から、惣領家の庇護を得られず、対立状況に置かれれば、同族の紐帯よりも地頭勢力の庇護を得て存続を図る庶流家も存在しうる。こうした荘官系領主層内で分裂・対立した一派が地頭勢力に結びつけば、南北朝期の南九州領主層の対立は、より錯綜する。(五味1967, 上村俊洋2017)

#### ① 平姓救二院氏と救仁院馬入道道西

平安末の救仁院の荘官系領主である救二院弁済使成直は島津荘惣地頭職島津忠久との軋轢から源頼朝に権益を否定され没落したが、「救仁院」を名乗り鎌倉時代の大隅半島で活動し、荘官系在地領主と軋轢を重ねる救仁院凶師馬入道道西という地頭代官がいる。平安末以来の郡司・荘官系領主と、地頭勢力の南北朝期以降の庶流が、他氏族でありながら同一地

域を本貫地として、同名字を名乗る例は多数ある。郡司・荘官系の、出水郡伴姓和泉氏、日置郡紀姓伊集院氏、給黎郡伴姓給黎氏、島津荘庄内日置姓北郷氏等には、それぞれ同名字の島津流庶家が存在する。救仁院図師馬入道道西の場合、「救仁院」を名乗る背景として、以下の可能性が考えられる。

- A 平姓救二院成直没落後、全くの他氏族が救仁院の權益を得て、同地を名字とした。
- B 成直没落後、その一族と他氏族が姻戚を結んだり、養子縁組等で救二院氏族を継承した。
- C 成直没落後、同族が地頭(島津荘大隅方名越流・日向方赤橋流)北条氏等の被官・代官化した。

馬入道道西の場合、救仁院図師を名乗っており、荘官である平姓救二院成直の同族の可能性もある。島津荘北郷(都城市)の日置姓北郷氏は、一族内で北郷の弁済使職・図師職を併せ持った。百疋村弁済使職を持つ藤原姓富山勾当安兼の同族内でも島津荘内各地の郡司職・弁済使職・図師職を併せ持つ。源頼朝に救二院成直の權益を否定された後も、平姓救二院氏一族は救仁院図師職を保持した可能性がある。

## ② 伴姓救仁郷氏と救仁郷源太

11c前半に島津荘を立荘した平季基の娘(または孫娘)婿伴兼貞の子兼俊(肝属氏初代)の子兼綱から伴姓救仁郷氏が始まる。季基所縁の系譜を信じれば、伴姓肝属氏族には1,000年の歴史があり、庶流も多く、一部の系図類が藩政期の編纂資料に掲載される。その一つ(「肝付系図」(『鹿児島県史料 伊地知季安著作集 四』諸家系図文書六-517))では、

○肝属氏四代兼員の後のA五代兼石以降、  
○救仁郷初代兼綱の後のB二代兼持・兼晴以降、  
○検見崎初代兼友の後のC二代兼種・良秀以降の、  
それぞれの系譜が、Aが救仁郷兼綱に、Bが検見崎兼友に繋がれ、Cが兼綱・兼友兄弟の弟扱いとして、転写時に錯誤したと思われる記載となる。通常見られる救仁郷氏系譜の二代兼晴・三代兼長とも上記系図では兄弟格で「養子」と注記され、兼長とその子等は「関東仕候」とも注される。また「関東仕候」を注しない別の兼長子の系統では、兼長―兼宗―助宗―助國と続く。加えて、兼晴・兼長と同じく兼綱養子として宗能(養子、蔵人と注記)が見え、宗能―宗胤―宗俊と続く。当該系図について、誤転写を前提とした上記の様な解釈が正しいとすれば、伴姓救仁郷氏は鎌倉期の早い時期から地頭方と結びついた(関東仕候)ことが窺われる。鎌倉時代末には惣地頭北条氏地頭代と思われる「源太資清」が北条得宗家と結びつき

が強い志布志津の救仁院志布志宝満寺へ領主として寄進する記事がある。この源太は、北条残党による建武元(1334)年七月三日「島津庄日向方南郷濫妨狼藉謀叛人等交名人等事」(『旧記雑録 前編』巻17)に島津庄日向方惣地頭北条(赤橋)守時(鎌倉幕府最後の執権)家人として「救仁郷源太」と見え、他に「同郷弁済使蔵人宗頼」が連記される。「源太」や、「頼」「宗」といった通字等は源姓にもみられる。上記救仁郷系譜にも通字「宗」の一流や、助宗―助國の一流もあり、「スケ」音を共有する源太資清や蔵人宗頼と同族の可能性もある。中世後期以降、救仁郷を継承する大崎郷の飯隈山飯福寺別当職に源姓救仁郷氏(足利氏族の系譜を伝える)がいる。伴姓肝属氏族の救仁郷氏は鎌倉期に、本家肝属氏から離れて、地頭北条氏の被官・代官化し、姻戚または養子関係によって源姓化した可能性がある。

## ③ 島津庄日向方南郷濫妨狼藉謀叛人等

前述の建武元年の北条残党による濫妨狼藉謀叛人等交名人等には、伴姓肝属氏庶流と同名字の人物名(橋口・中野・平良・梅北・検(見)崎・串良)が見られる。救仁郷氏で想定した他氏族との系譜交替の可能性もあるが、荘官系伴氏一族の中には、鎌倉幕府滅亡後、北条氏残党に加わるほど、鎌倉期に地頭北条氏に結びついた庶流が多数存在することが窺われる。肝属氏が建武政権系統の南朝方に属した姿と対照的であり、鎌倉期に異なる道を進んだと思われる。

## (2) 領主居館の変化

中世領主居館は、生産・物流拠点の平地・微高地上に、権威を示す視覚効果の高い大溝(箱堀等)で区画した中世前期の平地拠点から、抗争に備えて居館の防御機能を高め(薬研堀と土塁の整備)、山城を近隣に構築して城塞化した。恒常的に山城上に居館を設けたことは、抗争の常態化への対応とともに、高所から権威を示したともみえる。一方で、現在に至る集落区画軸を形成した永吉天神段遺跡第2地点第3期に相当する室町時代以降は、島津氏による三国統一まで領主間抗争は続き、山城の拡充も進むものの、南九州外から新勢力の流入・定着は見られなくなる。

## (3) おわりに

南九州の中世前期の居館跡の調査事例は少なく、永吉天神段遺跡の区画軸変遷を導入に、断片的な情報から、南北朝期以前の様子を紹介した。本企画展は、上村が企画・運営、竹森友子が分担・補助、学

芸課が展示作業を行った。展示に至るまでには、下記の方々の御指導・御協力を得て、御所蔵元の御厚意を賜り多数の資料及び資料画像を貸与していただいた。併せて御礼申し上げます。

#### 展示の御指導・御協力者(敬称略)

有川孝行 池田亘 折田裕斗 黒川忠広 河野賢太郎  
郷原麻鈴 小水流一樹 下小牧潤 下鶴弘 新地浩一郎  
関明恵 近沢恒典 徳永愛雄 中村友昭 堀之内清子

#### 展示資料及び画像御所蔵元

鹿児島県立埋蔵文化財センター 始良市教育委員会社会教育課  
伊佐市教育委員会社会教育課 鹿児島市教育委員会文化財課  
鹿屋市教育委員会文化財センター 霧島市教育委員会社会教育課  
日置市教育委員会社会教育課 南九州市文化財課  
都城市教育委員会文化財課

#### 参考文献

始良市教育委員会編『始良市埋蔵文化財発掘調査報告書』  
2013「市頭A遺跡 市頭B・C遺跡」(報告書4)  
始良市誌編纂委員会編  
2022『始良市誌』第2巻 中世・近世編  
安藤保 2013「吉利郷惣絵図」(『鹿児島県文化財調査報告書』59)  
池畑耕一1985「西ノ平遺跡と薩摩郡衙」(上)(隼人文化研究会編『隼人文化』16)  
1986「西ノ平遺跡と薩摩郡衙」(下)(同上18)  
井原政純2003「平安時代の吹上」「中世の吹上」(吹上郷土誌編纂委員会編『吹上郷土誌』通史編一)  
大分県教育庁埋蔵文化財センター編  
2010「中世の堅穴建物について-大分県下の事例から-」(同編『豊後府内16』第3分冊(『大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書』48))  
鹿児島県教育委員会(以下「県教委」)編『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』  
1983「成岡・西ノ平・上ノ原遺跡」(報告書28)  
鹿児島県立埋蔵文化財センター(以下「県埋セ」)編『発掘調査報告書』  
2002「高井田遺跡」(報告書35)  
2011「渡畑遺跡2」(報告書159)  
鹿児島市教育委員会編『鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書』  
1992「谷山弓場城跡」(報告書11)  
1996「北麓遺跡」(報告書21)  
2015「北麓遺跡」(報告書74)  
2016「不動寺遺跡」(報告書76)  
2017「北麓遺跡」(報告書79)  
鹿児島市ふるさと考古歴史館企画展

2022「すわ! 谷山」

上村俊雄1994「南九州出土の湖州鏡について」(鹿児島大学法文学部紀要『人文科学論集』39)  
上村俊洋2017「志布志湾岸における古代末～中世前期の領主間交流」(東串良町教委・隼人文化研究会・鹿児島地域史研究会合同シンポジウム『甦る大隅国の実像-古代・中世の志布志湾岸-』)  
2018「総括」(後掲(公財)埋蔵文化財調査センター編2018)  
2020「守護所・守護館からみる鹿児島城」(令和2年度黎明館企画特別展『鹿児島城の城館』図録)  
2022「南九州の古道について3-令和2年度企画特別展「鹿児島の城館」補足-」(『黎明館調査研究報告』34)  
2023「令和4年度企画展『南九州の古道』」(黎報35)  
笠沙町郷土誌編さん委員会編  
1991『笠沙町郷土誌』上巻  
蒲生町教育委員会編『蒲生町埋蔵文化財発掘調査報告書』  
2001「三池原遺跡」(報告書5)  
川口雅之2018「古代の薩摩・大隅国, 多嶺嶋における律令制度の普及-考古学の成果から-」(県埋セ編『研究紀要・年報 縄文の森から』10)  
北野隆亮2005「和歌山平野における瓦器の分類と変遷-紀伊型瓦器碗の認識とその評価-」(『紀伊考古学研究』8)  
2006「紀伊型瓦器碗の編年と分布」(中世土器研究会編『中近世土器の基礎研究』XX)  
輝北町教育委員会編『輝北町埋蔵文化財発掘調査報告書』  
2005「新田遺跡・吉元遺跡」(報告書2)  
霧島市教育委員会編『霧島市埋蔵文化財発掘調査報告書』  
2006「桑幡氏館跡II」  
2008「留守氏館跡III」  
霧島市教育委員会編  
2017『平家物語の世界を訪ねて-一国指定史跡「大隅正八幡宮境内及び社家跡」-』  
霧島市立隼人歴史民俗資料館・黎明館編  
2013『大隅国建国と大隅正八幡宮の至宝～湾奥の古代・中世～』(大隅国建国1300年記念・黎明館開館30周年記念合同巡回企画展)  
金峰町編1987『金峰町郷土史』上巻  
栗畑光博2017「考古学からみる島津荘の成立」(上野原縄文の森平成29年度考古学講座第3回資料)  
(公財)埋蔵文化財調査センター編『埋蔵文化財発掘調査報告書』  
2014「中郡遺跡群」(報告書1)  
2015「天神段遺跡1 弥生時代～近世編」(報告書3)  
2016「永吉天神段遺跡 第1地点」(報告書8)  
2018「永吉天神段遺跡3 第2地点-2 古代・中世・近世編」(報告書17)  
2019「永吉天神段遺跡4 第3地点」(報告書22)

国立歴史民俗博物館編企画展図録

- 2010『武士とはなにか』  
2022『中世武士団 地域に生きた武家の領主』  
五味克夫1967「島津庄日向方救二院と救二郷」(寶月圭吾先生還  
暦記念会編『日本社会経済史研究』古代中世編)  
1983「薩摩郡平礼石寺と守護・地頭・郡司の関係-旧記  
雑録前編所収山内文書について-」(前掲県教委  
1983, 初出鹿児島中世史研究会編1977『鹿児島中世史研  
究会報』37)  
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター編  
2010「上ノ村遺跡Ⅰ」  
阪本敏行2011「熊野水軍 中世前期を中心として」(谷川健一・  
三石学編『海の熊野』)  
下鶴 弘2021「中世島津家の居城-木牟礼城から碓山城、そして清  
水城へ-」(令和3年度黎明館ふるさと歴史講座資料)  
2022「中世の加治木・帖佐・蒲生」(『始良市誌』第2巻)  
下向井龍彦2022『平将門と藤原純友』(日本史リブレット017)  
川内市編1974『川内市史』石塔編  
1976『川内市史』上巻  
川内歴史資料館編  
1985『川内市文化財要覧』  
高島緑雄1978「辺境荘園の領主と農民-薩摩国伊作荘・日置北  
郷-」(西垣晴次編『鎌倉武士西へ』(地方文化の日  
本史 第3巻))  
1993『日置北郷調査報告-元享4年「日置北郷下地中分  
絵図」の研究-(鹿児島県日置郡日吉町吉利北区)』  
1996「薩摩国日置北郷下地中分の研究-中分線の現地  
比定・西海から下司藪まで-」(明治大学人文科学  
研究所編『研究所紀要』39)  
堂込秀人1999「中世南九州の堅穴建物跡」(南九州城郭談話会  
編『南九州城郭研究』創刊号)  
永山修一2002「高井田遺跡の古代における歴史的位

- 置」(国立歴史民俗博物館編『研究報告』232)  
隼人町教育委員会編『隼人町埋蔵文化財発掘調査報告書』  
2001「留守氏館跡」  
2003「桑幡氏館跡」  
2005「留守氏館跡Ⅱ」  
隼人町立歴史民俗資料館編  
1992「調査研究 小田松木藪遺跡の調査」(『年報』)  
日置市教育委員会編『日置市埋蔵文化財発掘調査報告書』  
2007「吉利古城遺跡」(報告書1)  
日吉町郷土誌編纂委員会編  
1982『日吉町郷土誌』  
日吉町教育委員会編『日吉町埋蔵文化財発掘調査報告書』  
2003「原口遺跡」(報告書4)  
平田信芳1997「古代の大隅地域-大隅郡の境域と日向への道  
-」(県教委編『歴史の道調査報告書 第五集 大  
隅地域の道筋』)  
松尾剛次2012「中世叡尊教団の薩摩国・日向国・大隅国への展  
開-薩摩国泰平寺・日向国宝満寺・大隅国正国寺  
に注目して-」(『山形大学人文学部研究年報』9)  
三木 靖1971「薩摩国伊作庄内日置北郷下地中分絵図の問題  
点」(鹿児島短期大学編『研究紀要』)  
1981「島津荘薩摩方伊作荘, 日置北郷における下地中  
分について」(『鎌倉遺文 古文書編』20月報)  
2006「日置北郷下地中分関係遺跡」(『鹿児島県文化財  
調査報告書』52)  
2020「鹿児島の城と鹿児島城-史料にみる城-」(令和2  
年度黎明館企画特別展『鹿児島の城館』図録)  
南九州市教育委員会編『南九州市埋蔵文化財発掘調査報告書』  
2009「馬場田遺跡」(報告書3)  
2021「市内遺跡発掘調査等報告書平成29年度~令和2年度  
清水磨崖仏・金山(轟製錬所)跡等」(報告書9)  
南九州市ミュージアム知覧企画展  
2022「鎌倉頃の13件」  
都城市教育委員会編  
2013「国指定10周年記念シンポジウム 大島島田遺跡の時代  
を語る-島津荘成立以前の都城盆地の動向-」  
2018「大島島田遺跡から島津荘へ-盆地の黎明へ-平  
成29年度歴史シンポジウム記録集」  
2022「郡元西原遺跡-確認調査総括報告書-」(『都城  
市文化財調査報告書』149)  
宮崎県立西都原考古博物館編  
2023「大地を刻む~変化する日向の城~」(令和5年  
度特別展展示及び展示図録)  
宮崎県立埋蔵文化財センター編『発掘調査報告書』  
2008「国指定史跡大島島田遺跡」(報告書178)  
守岡正司2022「益田市美都町本郷遺跡出土の湖州鏡」(島根県  
古代文化センター編「中世石見における在地領  
主の動向」(『島根県古代文化センター研究論集』28))  
米沢市教育委員会編『米沢市埋蔵文化財調査報告書』  
2000「古志田東遺跡発掘調査概報」(報告書70)  
綿貫友子2010「中世の太平洋海運」(海事博物館編『研究年報』38)  
(かみむら としひろ 本館学芸課主任学芸専門員  
兼企画資料係長)